

## 特攻隊 I

戦後、特攻隊が世界中で尊敬されている、という本が何冊も出版されている。たとえば、フランスのジャーナリスト、ベルナール・ミロは、「この行為（特攻）に散華した若者たちの採った手段は、あまりにも恐ろしいものだった。それにしても、これら日本の英雄たちは、この世界に純粹性の偉大さというものについて教訓を与えてくれた。彼らは、千年の遠い過去から今日に、人間の偉大さというすでに忘れられてしまったこの使命を、とり出してみせてくれたのである。」

特攻に出撃する時の何枚かの写真があります。その写真をよく観ると、出撃する若者や少年たちはみんな微笑しているんですよ。顔を伏せて泣いているのは、見送っている女学生や子どもたちなど、見送る人たちばかり……。あの微笑は精一杯の彼らの優しさなんです。残る人たちを悲しませたくない、という思いやりなんです。

これを、わが国の国民は、敗戦後突然「特攻くずれ」とあたかもならず者のように表現し、軽蔑した。たとえば、第一号の関大尉の遺された母親に対し、戦時中はあれほどちやほやしたくせに、態度を豹変、村八分の状態にしてしまった。結局、このお母さんの願いも空しく、墓は立てられなかった。

……。特攻は、自発的行為ということになってはいるが、事実上、「命令」に近かった。……。ギャグで無理強いしながら、相手がしぶしぶ承諾すると、「そこまで望むなら……」というのがあるが、まったくこういう状態であった。だから、なぜ特攻できなかった若者を侮辱・軽蔑するのか、ボクには理解できない。彼らが戦争を引き起こしたわけでもない。

誰がひとつしかない命を的に、悠久の大義に殉ずる、などと積極的に志願するものか！自分が生きていてこそ、喜びも悲しみも楽しみも味わえるのである。若者や少年たちは、彼らの故郷や両親、兄弟姉妹、妻や子、恋人や幼い子どもたちを守るために、わが命を捨てて敵を攻撃、すなわち死を選んだ。

特攻隊員の遺書を読めば、大義のため、というのもあれば、特攻そのものに懐疑的なものも多い。これを大々的に宣伝材料として、戦前・戦中真つ暗史観の拠り所とする反日に洗脳された者も戦後には現れる。無視するしかない。

もっとも端的に特攻を評した遺書は、長谷川信少尉の「俺たちの苦しみと死が、俺たちの父や母や弟妹たち、愛する人たちの幸福のために、たとへわづかでも役立つものなら」

この表現は、アッツ島や南方の島で次々に玉碎し、あるいは硫黄島に籠もった兵士たちにも共通しているのではないか。「1日攻撃を遅らせることができれば、1日愛するひとたちが生き延びることができる。」

全員が従容として死に臨んだわけではない。若者たちは馬鹿ではない。戦況を考えれば自ずからわかることである。当日、特攻を命令される人もいるが、何日も何週間も前から宣告されている人も数多い。

特攻はいやだ！

赤子

全部オ返シスル

玉砕 白紙 真水 春の水

ある中尉が、日章旗をもって宿舎からトラックに乗って飛行場に行く。トラックに乗った時、“おかあちゃん、海軍が俺を殺すんだよ！”って怒鳴った。

2人の中尉のどちらかが特攻を命じられる。部隊長が来て、当然、部隊長の隊の中尉に命令すると思ったら、違う方を指名した。帰り道、命令された中尉がもうひとりの方をぶん殴った。殴られた人の話。

俺は本当は死にたくないんだ（あとでわかったことだが、母1人子1人の家庭だった。）

柳田邦男氏が「零戦燃ゆ」に、何千とある中から、2編を選んでいる。

「私は誰にも知られずに、そっと死にたい。無名の幾万の勇士が、大陸に大洋に散っていったことか。私は一兵士の死を、この上もなく尊く思う。

母上、さようなら。母上に絹布団にねていただきたかったのに。」

いつ出撃命令が出るかわからない。明日かもしれない。出撃命令は、即、体当たり戦死命令である。そういう限界状況に置かれたとき、多くの若者たちは母や妻や恋人への澄み切った愛を感じ、そこに最後の魂の救いを見出していたようにみえる。絹布団に寝るといふのは、当時の日本人の庶民感覚では最高の贅沢を象徴的に表すものだった。

それにしても「私は一刻が恐ろしかった。一秒が重荷だった。」とは。己が命の実存と人生の選択の自由とを完全に奪われてしまった状況下ならではの苦悩を、これ以上ににじませた表現はないのではなかろうか。

神坂次郎さんが、特攻隊員の遺書を、「命の声が聞こえる。」とまとめておられるが、特攻に対して憤りを感じているし、若い兵士を特攻に駆り立てながら、自らは戦後まで生き残った卑怯な連中のことも追及している。

ホンとにね、泣き叫ぶごたるですよ。18、19、20（歳）でね。誰が喜んで死ぬ奴がおるかちゅうてね。おふくろが悲しむっていうのが、死んでいく人間には一番悲しいことだね。若者が命を国に捧げるのは当たり前かもしれないが、それを求める国の方にはおのずと節度があるはずですよ。それを超えた結果であることを、僕はどうしてもわかってほしいと思うてですね。

至純の特攻の若者たちを石つぶての如く、修羅に投げ込み、「諸子だけはいかせぬ。この富永も最後の一機で突っ込む決心である」と軍刀を振りかざして大言壮語し、戦況不利とみるや部下を放置し、フィリピンから台湾までわれ先にと遁走した四航軍司令官富永恭次中将と参謀たち。台湾で胃潰瘍と称して温泉に浸っていた。明らかな敵前逃亡である。陸軍に席次順人事を持ち込んだ参謀本部人事局長の富永は、戦場など見たこともない役人だった。(敵前逃亡の例は、まだある。インパール作戦失敗後木村兵太郎ビルマ方面司令官は、ラングーンから飛行機で逃亡している。このため、このため現場の混乱は日本軍のみならず、インド国民軍やビルマ軍にも影響がでてガタガタになり、7万人が飢えとマラリアで死んだ。これも軍務官僚で、将校ではなかった。こんなのを司令官にすること自体、日本軍の欠陥が露骨に現れている。　まだある。ニューギニアの戦場に航空部隊7000人の将兵を置き去りに敵前逃亡した第六飛行師団長　稲田正純少将。さがせば、もっといるかもしれない。))

敗戦直後、知覧からの“将軍自身による”最後の特攻決断を鈴木大佐から迫られ、「死ぬばかりが責任を果たすことにならない」と唇をふるわせた六航司令官菅原道大中将と参謀長の川島虎之輔少将。

そんな彼らが戦後長く生を貪って、亡霊の如く老醜をさらしてきた。

生きて虜囚の辱めを受けず、と言いつけた東條英機や土肥原賢二は、生きて東京裁判に出席した。

宇垣纏は、特攻を命じるが兵は単独で行く。あるベテラン・パイロットが、攻撃がすんだら戻ってもいいかと尋ねると、「ならん！」とわめいた。敗戦が決定したとき、単独で特攻もできず、20数名を道連れにした。中津留大尉の父上が、「死ぬならひとりで死んでほしかった」と言った。

……こんなだらしのない連中の命令で、特攻や戦闘で実際に戦った人が気の毒である。

特攻については、大西瀧治郎中将が発案者かもしれないが、それ以前から、そういう流れはあった。軍令部が知らない筈が無い。源田実は、死ぬまで知らないと否定した。岡村基春大佐は、桜花の実行部隊の司令で、全国を慰霊にまわり、昭和23年に鉄道自殺を遂げた。ちなみに航空関係者だけで58人が自殺している。

桜花の野中五郎少佐は、こんなバカな作戦があるか！と怒ったが、宇垣は認めなかった。野中は、部下だけを行かせるに忍びず、自ら15機の一式陸攻に桜花を吊り下げて出陣し、敵艦に向かうどころか、待ち伏せしていたグラマンFF戦闘機にたちどころに撃墜されてしまう。

「特攻」ということでやりきれなかったのは、たまの休日に基地から町に外出した特攻兵を、「生きている軍神だ」と世間が自分勝手に賛美し、なかには感動のあまり土下座し、合掌し、涙を流している老婆もいたことです。

それが当時のマスコミや世間の表情でした。

その世間やマスコミや民衆が、にわかには掌を返し、特攻兵を罵倒するのは、敗戦の8月15日以降のことです。「特攻くずれ」、それが新聞やラジオや民衆が、戦場から命を拾って帰ってきた若者たちに浴びせかけた声です。すごい裏切りでした、あれは。

あの戦争は、国民を守るための国家が、国民を殺してまで国体をまもろうとしたのですよ。そして、政治家や軍の上層部が裏切り……

それらには深い怒りを感じますが、いちばん辛かったのは、戦争や戦災で命を失った人びとの死を「犬死」だと吐き捨てるように言った奴らの言葉ですね。

理不尽な戦争に巻き込まれてにんげんが死んだのですよ。多くのいのちがうしなわれたのですよ。血の通った人間ならもっとあたたかい表現があってもよいのではないですか。

そして、その“戦場”でかなしい死をとげた人びとを悼むことがなぜ「軍国主義」につながるのか。

#### 閑話休題

日本人の国民性云々を淵田美津雄が述べているが、戦後、国民は軍部に騙されたと怒った。しかし、考えてみれば、日露戦争の講和条件が気に入らない、と新聞社を焼打ちしたり、5.15事件や2.26事件の犯罪者をかばい、軍部に都合のいいように動いたのも国民である。結局戦争まで突っ走る原因を作ったのも国民である。敗戦後は、東京裁判史観やウォー・ギルト・インフォメーション（悪い戦争をしたのは日本だ、侵略戦争をしたのも日本だ、原爆を落とされたのも仕方が無い、と罪の意識を植え付けられ、一億総懺悔に動いたのも国民である。）に踊ったのも国民で、70年経っても、いまだに多くの国民は罪悪感に取り付かれています。洗脳されたままです。ハーグ国際条約に違反している敗戦国の憲法に触れない取り決めを破ったのはアメリカ（マッカーサーでもいいが）である。そのお仕着せの憲法を変えることに反対するのも国民だし、まともなサイレント・マジョリティーの話を聞こうともしないのも国民だ。今は、ジェネリック医薬品で、またまた騙されている。まともなものもあるが、まともでないものもあるのを知らないし、理解しようとしません。お上の言うがまま、なすがまま。国民は小さな嘘には気付くけれど、大きな嘘には気がつかない。新聞もいい加減なものである。煽ったのは、彼らではないか。

#### でっちあげられた「特攻」伝説

いろんなデマが乱れ飛んだ。たとえば、特攻にでる場合、「片道燃料しか積んでいなかった」という人がいます。とんでもないウソです。

整備兵は、自分の手掛けた飛行機には、ものすごく愛着を持っている。若い搭乗員がその飛行機に乗って、返らぬフライトに旅立つんですよ。どんなに旧式の飛行機でも、ガタが来ている飛行機でも完璧に整備しようと出撃の前夜は、その特攻機の翼の下で眠るといふほど努力し、燃料も満タンにします。

それがにんげんの情です。

翼とり尾部を抱いて何処迄も別れを惜しむ基地の整備兵（つわもの）・・・知覧出撃  
岡安明少尉

赤トンボ（練習機）に爆弾を針金でくくりつけて飛んで行った、という話があります。  
が、番線（針金）で爆弾がくくりつけられますか？ たとえくくりつけたとしても、舗装もされていない当時のがたがたの滑走路を飛びたてますか。

開聞岳の麓で訪ねた老農の涙

当時すでに 40 歳過ぎで、三角兵舎の当番長を勤めていたというが、老人は、まだ星の出ている特攻出撃の早朝、熟睡している隊員たちを起こしに行き、「起床の時間であります。ただいま 4 時であります。」

そう告げるのが任務であった。ところが（質問者の質問が）そのくだりになると、老人はにわかに顔を歪めて絶句し、大粒の涙を膝にしたたせさせた。

老人の話はそこから先に進まなかった。涙をこぼしながら老人はそれでも私（質問者）のために何度か話を進めようとしたが、「起床の時間であります。・・・」そう言うと、また咳き上げ唇をふるわせるのである。

戦後刊行された学徒出陣の記録の仲には、戦争否定の思いを抱きながら死地に赴く苦悩を綴ったものも多い。そのため、都合のいい部分のみを取り上げて、特攻を非難する理解力の悪い連中もいる。しかし、祖国の必勝を念じ、敢然と起死回生の捨石たらんと戦陣に加わり、いのちを散らしていった学徒たちも、より多かったのである。

我等 明日を待みき  
されど 明日は  
遂に来たらざりき

読みかけの原書に葉をはさんで、「ふたたび帰ってきて書物の前に座れるのはいつの日か、と考えますと、まことに寂しい次第です」と父への手紙をしたためた板尾與市は東方海上で戦死。

その、戦いの帰趨までに見えた大戦末期、西田高光中尉は、親しくしていた報道班員山岡莊八に、戦いに勝てるとは思っていないと言い、「しかし負けたとしても、そのあとどうなるのでしょうか。・・・おわかりでしょう。われわれの生命は講和の条件にも、そのあとの日本人の運命にもつながっていますよ、そう、民族の誇りに・・・」そう告げ、出撃して行った。

特攻隊員になる思いは「家族のため、国のため」というのが、あの時代の気風というよ

りも若者の誇りだった。なぜ行かなくてもいい戦争に特攻を志願したのか。……日系二世の松藤大治少尉は、「日本は戦争に負ける。でも俺は、日本の後輩のために死ぬんだ。」見送りの人々に挨拶をし、「身を鴻毛の軽きに比し、生命を擲って、私は祖国のために頑張っただけです。男の本懐、これに過ぎるものはありません。」

朝鮮人や台湾人からも、特攻志願者や特攻死した人はでている。

後に残してゆく祖国日本への思いは、沖縄特攻作戦に出撃した世界最大、超弩級の戦艦「大和」の哨戒長、臼淵磐大尉は、航空部隊の援護もなく、片道だけの成算ない作戦の中で、吉田少尉たちに言う《進歩のない者は決して勝たない。負けて目覚めることが最上の道だ。日本は進歩ということを経験して過ぎた。私的な潔癖や徳義にこだわって本当の進歩を忘れていた。敗れて目覚める、それ以外にどうして日本が救われるか。俺たちはその先導になるのだ。日本の新生に先駆けて散る。まさに本望じゃないか》(原文カタカナ)

《臼淵大尉(後部副砲指揮官)直撃弾に斃る 智勇兼備の若武者 一片の肉 一片の血を残さず 死をもって新生の目覚めを切望したる彼 真の建設への捨石として捧げ果てたるかの肉體はあまねく虚空に飛散せり》

藤井一中尉は、夫人と2人の幼子をかかえている。特攻志願をしたが認められなかった。再三にわたり希望し、ようやく認められた。夫人は、上の子に晴れ着を着せ、下の子と紐でつないで、荒川に入水自殺した。遺書は「私たちが居りましては後顧の憂いともなり、思う存分にご活躍できませぬゆえ、一足お先に行かせて頂きます。心おきなく戦って下さい」といった意味の妻のふく子のもの。

藤井はじめ中隊の者数人が駆けつける。このとき、藤井が、涙をこぼしながら、いたわるように「奥さんの足」についていた砂を手ではらいのけておられたことが、いまでも目の底に残っています、と長沼曹長の述懐にある。

卑怯にも、不可侵条約を一方的に破棄し、満洲に攻め込んできたソ連軍の戦車に、夫婦そろって飛行機で体当たりした谷藤徹夫少尉夫妻。

植村真久氏は、経済学をまなんだ、立教大学サッカー部主将。この頃結婚。大村海軍航空隊で戦闘機訓練中に娘素子誕生。このため植村の特攻志願は容易に許されなかったが、植村はあきらめない。……ついにみとめさせた。

植村は子煩悩で、暇をみては大村空から電話して、素子の声を聞かせてくれ、とねだり、妻の芳枝を困らせた。

出撃前、そんな素子への訣別の手紙と休暇の1日、愛児を抱いた写真が遺されている。  
《素子

素子は私の顔をよく見て笑ひましたよ。私の腕の中で眠りもしたし、又お風呂と一緒に入ったこともありました。

素子が大きくなって私のことが知りたいときは、お前のお母さんか佳世子叔母様に私のことを良くお聴きなさい。私の写真帳もお前の為に家に残して在ります。

素子という名前は、私が付けたのです。素直な心のやさしい思ひやりの深い人になるようにとお父様が考へたのです。

私はお前が大きくなって、立派な花嫁さんになって幸せになるまで見届けたいのですが、もしお前に私を見知らぬままにしてしまっても、決して悲しんではなりません。お前が大きくなって、父に会ひたいときは九段へいらっしゃい。そして心に深く念ずれば、必ずお父様のお顔がお前の心の中に浮びますよ。

父は、お前は幸せものと思ひます。他の人々も素子ちゃんを見ると真久さんに会っている様な気がするのと良く申されていた。またお前の御祖父様御祖母様は、お前を唯一つの希望にしてお前を可愛がり下さるし、姉様も又、ご自分の全生涯をかけてただただ素子の幸せのみ念じて生きぬいて下さるのです。

必ず私に万一の事あるも親無児などと思つてはなりません。父は常に素子の身边を護っております。先に言った如く素直な人に可愛がられる人になって下さい。

お前が大きくなって私のことを考へ始めた時に、この便りを読んでもらひなさい。

昭和 19 年 9 月 吉日

植村素子へ

追伸

素子が生まれたときオモチャにしていた人形は、お父様がいただいて自分の飛行機にお守りにして乗せております。だから素子はお父さんと一緒にいたわけです。

素子が知らずにいると困りますから教へてあげます。

父

素子殿 》

昭和 42 年 4 月 12 日、たそがれ迫る九段の杜、靖国神社の拝殿で、父と同じ立教大学を卒業した素子は、6 歳から習っていた藤間流の名取、藤間都として文金高島田に振袖すがたで日本舞踊を奉納している。

愛する亡き父の霊を慰めるためであった。

母の芳枝や親族、友人、父の戦友たちが見守るなかで素子は、琴の音にあわせて、あでやかに「桜変奏曲」を舞いおさめた。そのあとで素子は、友人たちから贈られた花束を胸に抱いて、

「お父様との約束を果たせて、うれしい」と言った。

その言葉に戦友たちは堪らず、みな声を嘔み殺して泣いた。

大戦末期、九州最南端の特攻基地に近い女学校に1人の飛行兵が訪ねてきて、茶道をたしなむ老女教師に茶を乞い、彼女の点てた茶をしみじみと喫したのち、挙手の礼をして去っていった。その学徒兵は、母1人子1人の家庭で、茶道の師匠をしている母の手で育てられた若者だったのですが、その母への思慕を、人生最期の一服の茶にすがらせた。翌朝、特攻編隊の中にこの若者がいて、女教師は声をあげて泣き崩れた。遺書を残しては、いつまでも母を苦しめるという思いから遺書も残さず、一服の茶を喫して飛んで行った。

「国民」とひとまとめにしていうならともかく、学生たちは馬鹿ではない。生活水準や物資の不足などをみれば、この戦争には勝てないと思っていた。

これは、特攻隊や、硫黄島、ペリリュー島など太平洋の島々で飢えていたり、玉砕覚悟の勝算の無い戦いを戦っていた兵士たちも、同じ思いであったはずで、「一日でも、わが家族への攻撃を遅らせる」ために。

よくぞまあ、その記録を遺してくれたものだ、と思う。

2015. 04. 01.